

## 寺田寅彦と野村伝四の友情（前篇）

四宮義正

漱石の弟子三羽鳥といえは小宮豊隆、森田草平、鈴木三重吉になるのだろうが、もう少し前には熊本・五高での教え子野間真綱とその仲間である皆川正禧、野村伝四が足繁く漱石の下に通っていた。

野間は五高で寅彦の1年後輩、文科。よって漱石の教えを受けている。皆川は東京帝国大学文科大学英文学科で野間と同級、野村は同科の3年後輩である。二人とも野間の導きで漱石の所へ行くようになった。寅彦との最初の出会いは漱石宅である。

この三人を寺田寅彦書簡、日記で見ると、野村が飛びぬけて登場が多い。野村の方からの訪問や手紙が多かったためもあるだろうが、何と言っても何かと気が合ったのだろう。

野村の略歴を藤井淑禎『不如歸の時代 水底の漱石と青年たち』（1990年3月31日、名古屋大学出版会）及び原武哲編『夏目漱石周辺人物事典』（2014年7月25日、笠間書院）を参考に書き出してみる。

明治13年10月20日 鹿児島県肝属郡高山町前田西方で生まれる。

同33年3月 鹿児島県立第一中学校卒業。

同36年7月 第一高等学校卒業。

同39年7月 東京帝国大学文科大学英文学科卒業。

同39年9月 東京の私立錦城中学校教諭となる。

同41年2月 同郷の中摩せいと結婚。

同44年9月～岡山を振り出しに山口、鹿児島、愛知、大阪で教諭を勤める。

大正10年3月 奈良県立桜井高等女学校長となる。

昭和3年1月 奈良県立五條中学校長となる。

同9年6月 奈良県立奈良図書館長となる。

同17年4月 同館退職。

同23年7月26日 奈良の自宅で死去。享年69。

野村は寺田寅彦より2歳下。漱石が英文学科で教えていたのは明治36年4月～同40年3月だから、3年間教えを受けたことになる。

参考までに、皆川正禧は明治10年2月5日～昭和24年4月24日。享年72。野間真綱は明治11年1月25日～昭和20年9月3日。享年67。

寅彦と野村の交遊（書簡）と寅彦没後の活躍を三時代に分けて述べる。

### 1. 野村の東京帝国大学時代

このころ漱石を含めて、みんな文章を書く事に熱中していた。『ホトトギス』や『帝国文学』に書いている。子規の主張、文章には山がなければいけない、ということで山会と称

し、作品を朗読して批評し、感想を述べ合っている。また夏目家などで文章会というものがあった。『ホトトギス』の関係で高浜虚子が読み手を務めることが多かった。

野村の文章について漱石が助言した手紙は沢山あるが、ここではそれは最小限にして、寅彦からの手紙を中心に、寅彦日記、漱石書簡、野村の作品を時系列で並べてみる。

○漱石⇒野間真綱〔書簡〕明治 37 年 7 月 20 日

俣野大観先生卒業。彼云う。訪問は教師の家に限る。こうして寝転んで話しをして居ても小言を言われないと。僕の家にて寝転ぶもの曰く俣野大観曰く野村伝四。半転びをやるもの曰く寺田寅彦曰く小林郁。危坐するもの曰く野間真綱曰く野老山長角。

漱石の弟子たちの性格がよく分かる。藤井淑禎は漱石が野村について、「人目を気にしない、物怖じしない率直で飾り気のないフランクな性格であり、誤解を恐れずにいえば、一種極楽とんぼ的な受け取り方をしていたものと思われる。」と書いている。

○寅彦⇒漱石〔はがき〕明治 38 年 2 月 19 日頃

○村○四さんの「二階の男」面白く拝見しました。中々うまいものです。格別の山もなく谷もないかわりに厭味もなく近来兎角溜飲につかえる文壇には大に歓迎すべき一服の清涼剤であると考えます。猫伝以来の出色の文字感服しました。猶進んで二階の女か何かかいて貰い度者です。そうすると私も何か一つ「床下の狸」でも書く。洛陽の紙価が十四パーセントあがる。愉快ぢやありませんか……

この手紙は残っていないが漱石が伝四に宛てた明治 38 年 2 月 22 日の書簡に引用されている。これは寅彦が漱石に伝四の作について伝えているので、寅彦と伝四の間は直接の通信は遠慮があった時期なのであろう。

「二階の男」は雑誌『七人』（明治 38 年 2 月）に掲載された伝四の作品。筆名は「○村○四」であった。日本近代文学館に収蔵されている。

寅彦のはがきに先だって、漱石から伝四宛てのはがき（2 月 16 日）に「サラサラトとよくかいてある。強いて非難をすると一篇の山がない。まとまりがわるい様だ。然し中々名作だ。大にやり玉え。」とある。

小説の内容は、下宿していた藪中家の様子と主人公横山の書生生活が書かれているが、どちらが重点なのかははっきりしない。子規の教えである「文章には山がなくてはいけない」に添っていないということだろう。

『七人』は伝四の同級生である小山内薫が発行人の同人雑誌。明治 37 年、川田順などとはじめた。伝四は準同人だった。

「二階の男」の冒頭を引用してみる。

本郷六丁目の松屋ノート店と岡崎屋書店との横丁を這入って、一町足らず行くと、

左っ側に近頃新しく出来た、村上と云う家がある。その次に三軒つづきの長屋で二階のある家がある。初めが西洋洗濯、真中が女かみゆいの札が掛かって、最期のが新聞大売捌所になっている。これからの話はこの女かみゆいの二階の一間を借りて居る男のことであるが、ここの主人は藪中鶴吉と云って、年は四十前後、極の正直者で、(略)

寅彦の手紙の宛先が藪中家となっているので、名前をそのまま使っていることが分かる。主人の鶴吉もそのままである。のどかな時代といえるかもしれない。

この後、藪中家の家族と遠慮なく話している様子が書かれている。次に場面転換して、着る物に無頓着だったが、冬になって寒くてたまらず、故郷の兄や嫂に綿入れなどを無心しようと手紙を書くが出すのを忘れてしまい、仕送りが届いたらイタリアの美術本を買って、別の本を買うためにまた名文の手紙を書こうとしている夢想家、横山（野村のこと）が描かれている。

○寅彦日記 明治 38 年 2 月 25 日

蓬来町でビール三本買って夏目へ行く。(略) 牛を煮て食う。虚子「石棺」を読む。伝四遅れて来る。虚子漱石の「幻の盾」を読む。十一時散会。

○漱石⇒伝四〔書簡〕明治 38 年 3 月 10 日

妻君が夫の手をあたためる所は先達てはいけぬといったが昨夜傍聴した所では大いに振って居る。毫も厭味も乙な色気もなく出来て居る大いに佳也。結末の「此事件は此で結了した」という意味の語は尤もうまい。ちっとも洒落ても気取っても居らん。極めて平凡極めて真面目な裏に大いに奇抜なとぼけた様な馬鹿にした様な所がある。結構です。僕は全体からいうと二階の男より月給日の方がよいかんじがする。

上記の手紙は伝四の「月給日」についての感想である。漱石は弟子の作品について遠慮なく叱ることもあるが、概して褒めるのが上手であった。

「月給日」は明治 38 年 4 月、『ホトトギス』に掲載。この号には寺田寅彦「団栗」、漱石「吾輩は猫である」(三)、漱石「幻影の盾」も掲載されている。表紙は橋口五葉。

〈あらすじ〉

会社員の男が、給料日に給料をもらうことを楽しみにウキウキと出勤し、給料をもらって帰り、生活費以外の余りを亭主の好きな本に使うか、妻の好きな着物に使うか、自分の都合を述べあい、結局 10 円の余剰を妻に与えるという他愛無いものである。新婚らしく、お互いに自分の有利な方にもっていこうとするほのぼのとした会話がなかなか良い。

○寅彦日記 明治 38 年 8 月 27 日

夏目先生を訪う。野村君約により来る。鈴本亭の落語へ先生を誘う。先生は午後晚翠等と偕楽園にて集会の約ある由なれど強て誘うて行く。落語等は満員客止なり。浅草公園に行く。日曜にて久々に晴たれば人出多し。電車にて有楽軒へ晩餐に行く。

帰途外濠線にのる。雷雨。御茶の水橋にて停電、よき雨宿りなり。ついに徒歩して帰る。即興の秋雨吟を戦はず。駄句ばかりなり。

これ以降、9月1日、同10日、同16日にも漱石宅や同行先で伝四と会ったことが書かれている。

○漱石⇒伝四〔はがき〕明治38年11月15日

昨夜下駄物語をよむ。うまく出来ました。文章が段々上手になってくる結構々々。あれはあとがあるのだろうね。あれ丈では纏らない。あの茶屋の所は写生だね。どうも写生は無理がないから生きて居る。

これは『帝国文学』11月号に出た「下駄物語」を読んでの感想である。この続きが翌月号に掲載されている。

『帝国文学』は学術・文芸雑誌。高山樗牛、桑木巖翼らを中心とする東大文科の関係者が結成した帝国文学会の機関誌。編集委員は学生が主で土井晩翠、小山内薫、和辻哲郎等がいた。

〈あらすじ〉

はっきり名前は書いてはないが、藪中家ものの続きのようである。

(一) 二階に下宿している本野が湯屋で下駄を間違えられたので、下宿のお婆さんが湯屋に取り返す交渉に行くが埒があかない。陰暦九月十三夜の街の描写、家族との会話。

(二) 元は同じクラスの二人（落第してまだ学校にいる本野と卒業して羽振りのよい友人）が夕立にあつて茶屋に駆け込む。友人は良い下駄とパナマ帽で、本野の汚い下駄に対して鶯色の鼻緒の桐下駄を買うように勧める。雨に濡れながら急ぐ男女生徒の描写、二人の会話がよい。降りしきる雨の風景をターナーの絵にたとえる。友人は本を出したとのことで、洛陽の紙価が十四パーセント騰あがると思う、愉快じゃないか、と言う。雨があがった後の風景描写もよい。

(三) 本野は友人の本を買って嬉しくなり、蕎麦屋で鴨南蛮を食べ、帰ろうとすると下駄がない。女中とお主婦かみさんと一緒にあれこれ探すが見つからない。お主婦さんが新しい下駄を買って弁償してくれ、履いて帰る。

(四) 下宿でお主婦さんが新しい下駄が二つあつて変だという。本野が出掛ける時に、他の下宿人の下駄を履いて出たことに気が付く。お婆さんは、湯屋の仇を蕎麦屋で討って良かったという。

(五) 部屋に戻った本野は自分の粗忽さを思い返し、蕎麦屋の女中がお主婦さんに叱られたことを気に病む。蕎麦屋に謝りの手紙を書こうか、きまりが悪くて恥ずかしくてもう蕎麦屋に行けない、逆に知り合いと一緒に蕎麦屋に通い恩返しをするのがよいなどと悩む。結局下駄を蕎麦屋に返すことはせず、下宿の主人に進呈してスッキリするが、蕎麦屋の女中のことだけは可愛そうだと思う。

ここにも「洛陽の紙価が十四パーセント騰る」というフレーズが出てくる。明治 38 年 2 月 19 日頃の寅彦から漱石へのはがきと同じである。漱石邸でこのような話題が出たのであろう。



左：『七人』四号（明治 38 年 2 月）表紙、伝四「二階の男」が掲載されている。（日本近代文学館蔵）

中：『ホトトギス』百号（明治 38 年 4 月）橋口五葉の表紙、伝四「月給日」、寅彦「団栗」が掲載されている。

右：『帝国文学』（明治 38 年 11 月）表紙、伝四「下駄物語」（一）（二）が掲載されている。（国立国会図書館蔵）

(1)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 38 年 12 月 10 日

表記の処に転居。賑々敷御来光を待つ。「不平」の続篇の材料でも供給可致候。

「不平」は明治 38 年 11 月、『ホトトギス』掲載。

〈あらすじ〉

ある男が短編小説を書こうとしているが、届かない原稿料が気になって一向に筆が進まない。細君はピアノをひいている。部屋に来た細君に、インスピレーションは美しい妻からもたらされるというような無邪気な話をする。そのうち下女が本屋から届いた原稿料をもって来る。二人仲良く外出して終り。最後に下女が「又今夜も御飯が余るだよ。」とつぶやく。「月給日」の続編のような感じである。

(2)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 39 年 1 月 2 日

明まして御目出度う御坐います。御雑煮食いに来玉え。

寅彦は前年 8 月に寛子と結婚している。家庭を見せたかったようだ。1 月 3 日には、漱石が年賀に寅彦宅を訪問している。

○寅彦日記 明治 39 年 1 月 7 日

夏目先生を訪う。野村君障子のほりかえをする所なり。キューラソに緑色の羊羹の御馳走あり。三人にて神田多賀羅亭に行き晚餐の馳走になる。

伝四が漱石からいろいろ雑用を頼まれていたことの一部がよく分かる。もっとも漱石は弟子に用事を頼んで経済的支援をすることが多かったようだ。キュラソーはオレンジの果皮を香料としたリキュール。

○寅彦日記 明治 39 年 1 月 13 日

夜田丸先生方へ行く約束して帰宅したるに、野村君来訪せし故田丸氏方へは断りの手紙を持たす。

(3)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 39 年 2 月 7 日 (水)

懲りないで又ちといらして頂戴。きうらそはなくてもべねぢくちん位はあるかも知れません。

benedictine は、ベネディクト会修道士に由来するリキュール。

(4)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 39 年 2 月 26 日

奇麗な御端書ありがとうございます。君の傑作まだ拝見致しません。是非見たいと思つて居ます。

日記によればこの日、伝四からはがきをもらっているのですぐの返事である。

(5)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 39 年 3 月 27 日

御親切な御手紙被下難有御招待なれば何時でも罷出可申、御望によっては「庇髪のスタビリチー」でも講演可致候。尤も御馳走なれば椎茸だけは平に御断り申上度右貴答迄

寒月先生

鼻野高子様

庇野出子様

其他御連中御一同様

伝四からの手紙が、『吾輩は猫である』の水島寒月に関して、よほどくだけた内容だったのであろう。伝四は寅彦がモデルであることを、十分に知っていたのであろう。この手紙も『猫』を読んでいないと判じがたい。

(6)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 39 年 5 月 2 日

記念絵はがきを難有うございました。私は四五日前から病気で寝て居ました故観兵式の盛典も招魂祭の賑も見のがしました。近々御卒業も近よりました御目出度う。今に大傑作が拝見出来ましようとお楽しみに居ます。

(7)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治39年6月5日

奇麗な葉書ありがとうございます。いよいよ御目出度う。近頃はしばらく先生処へ御無沙汰して居ますので諸兄の近状も承りませんが何か面白い御作でもありましたら見せて頂戴。此前の帝文へ御出しのもまだ拝見出来ませぬ。此の絵は垣隣の令嬢が君の傑作に酔うて居る所なり。次には美しいのを上ます。

寅彦は家庭を持ったので、漱石宅へはあまり行っていないことが分かる。またどちらのはがきでも伝四の大学卒業を祝している。

帝文は帝国文学で、「下駄物語」のことであろう。

「垣隣」は明治38年7月、『ホトトギス』掲載。漱石は伝四宛て明治38年5月26日付書簡で「垣隣」について、他作に比べて上等で小説的と褒めている。掲載前に文章会で朗読を聞いたのだろう。

〈あらすじ〉

第一中学の二年生村上時彌は絵が好きで、写生に出掛けるが雨に濡れる。麦の穂の緑、雨が降り出してくる霞や雲の描写が丁寧である。

同い年で隣に住んでいる鈴子が村上家を訪ねると時彌が寝込んでいる。両方の母親が仲がよくて将来一緒にしたいと思っており、鈴子は母と来て看病する。しかし、時彌はインフルエンザになって寝込んでしまうが、少し良くなったとき、病床で鈴子の肖像水彩画を描く。いろんな服装で何枚も真面目に描く。

時彌はだんだん回復し、振袖姿の鈴子を思い出して描く。鈴子が来て、この絵をもらうことになる。

時彌は絵を描くのに夢中になり、寒いのに無理して発熱、肺炎になって夢を見る。

山奥の古池、松杉などの大木が蔽いかぶさっている。広さは二三百坪、池の中のオタマや蛭の描写、大きな枯れ木が浮かんでいて、鈴子と時彌が乗っている、大きな蛙が二人の間にはいる、水中に引き込まれ、水よりも冷たい感じ、鈴子の名を呼ぶ、手を差し伸べられたところで夢から覚める。

再発から三日間寝込んで死んでしまう。鈴子母娘と時彌の母は墓参を欠かさない。

(8)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治39年7月11日

御目出度う

七月十一日 卒業式の翌日

(9)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治39年10月6日

「嵐」をほめて下さって難有う。此絵は一寸いいでしょう、淋しいでしょう。右の方に鴉を二三羽飛したらどうでしょう。月並になるかしら。

十月六日

寅坊

野村先生へ

二伸 私は十番地へこして居ます。

(10)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治39年11月1日

此画は唯見ては正に半文の価値もないが試に夜長の燈に照して見玉え。歓声湧き絃歌流るる不夜の境となる。其樂云うべからず。

思う事の空にくだくる花火哉



左：明治39年10月6日はがき〔着色ペン画石版刷夕暮の冬木立〕 右：同年11月1日はがき〔中沢弘光筆、美人爪弾きの図案〕いずれも『館報駒場野』45号掲載

(11)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治39年11月5日

塩原の紅葉三枚の内一枚は、絵はがきを挿む額面にはさんでオルガンの上に置いた。朝おきると眺める。学校から帰ると又眺める。実に美しい。次の一枚は私の甥に贈り、残る一枚はミュージックの本の中に挿んだ。今年の春挿んで置いたパンジーの花とページを隔てて春秋の記念になって居る。

藤井淑禎は「伝四には無類の優しさがあり、ウィットがあり、そしてユーモアがあった。」と書いている。旅先から「紅葉」を送るのも風流だが、それを飾るのは共に旅を楽しんでいるといえる。やはり波長が合っているのである。

(12)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治40年1月20日

寒水村を拝見しました。大変面白う御坐いました。趣向も珍しいし所々の叙景も面白かった。どうか時々あんなのを見せてくれ玉え。サツパリして居てよかった。淵の処と夜道が気に入った。

「<sup>モツミヅ</sup>寒水村」は明治40年1月、『帝国文学』掲載。『漱石の読書と鑑賞』（佐藤春夫編著、



昭和 11 年 5 月 20 日、小山書店) に再録されている。

〈あらすじ〉

村の小学校に赴任した校長夫婦が、生徒や村人から慕われている。五歳ばかりの男の子がいたが、子守が目を離した際に、急流に足をとられ深潭に沈んでしまった。そんなこともあって妻は都会に戻りたいが、夫は村民や卒業生の手前、帰れないでいる。この夫婦の、それぞれの思いを語る会話はよくできている。

或る時、校長宅の雨戸や戸袋などに悪口が落書きされる。その結果校長は失踪する。小使い等が見張りして犯人を探そうとするが外部から入った形跡がない。結局、妻の弟が落書きしたことが判る。弟が姉の為に独断でしたか、姉の依頼があったのかははっきりしない。

椿花の落花、妻が川へ向う時の深い森や川淵の描写、水死の様子など幻想的に書かれている。

藤井淑禎は「ただ、村人からも畏れられている「森の下の淵」のイメージは鮮烈であり、白昼、細君が「嬰兒の亡魂」に誘われるようにして木深い森を抜けて河原伝いに「竹の葉、木の葉を浮べ、黒みを帯びた泡を漲らして、渦を巻きつつ此処ばかり倒に流るる水の底は只青黒くして深さも測られぬ」「深潭」へと彷徨ってゆくあたりの描写は、ただならぬ雰囲気を漂わせている。」と書いている。

(13)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 40 年 10 月 24 日

当年は伊香保の紅葉ありがたく候。一葉は柱曆に挿みて霜を待つ心に候。

(14)寅彦⇒伝四〔書簡〕明治 41 年 10 月 5 日

今朝学校へ出たら机の上に君の御手紙が来て居た。封を開いて見ると大分長そうな御手紙だから実は何か特別な御用かと思うて拝見した。そして拝見して居る中に独りでにこにこして大に愉快になった。何だか急に自分がエラクなった様な気がした。そして本郷の通を歩いて居る時に君に合うて御互ににこにこする様な心持がした。

落第するかも知れぬと思うて出した論文が及第したので僕でも嬉しくない事はない。高等学校時代にホトトギスへ短い文章や募集句を投書して首尾よく掲載されたのを見る時の様な得意な感じはある。しかし同時に色々複雑な考が交って此小さな得意を打ちわす事も色々ある。僕は喜ぶべき時に充分喜ぶ事が出来ず悲しむべき時にも充分に悲しむ事の出来ぬ厄介な人間である。自分でも因果な性分だと思つて居る。そんな事を考えると野村君は羨しいと思う。今度唯一つ嬉しいと思つた事は僅かな友人がいづれも自分の事の様喜んでくれた事であった。此だけの友達があれば出世しようがしまいがそんな事はどうでも宜い。此の意味に於て我が野村君は最も幸福な羨むべき人だという事は前から考へて居た。此れは僕ばかりではない。

いくら君がそう云つてもアンジェロやダヴィンチは僕にはちっと六かしいから困る。尺八の穴の研究位が相当だから不相変コツコツやるより外に仕方はない。其内いつか又御玉さんでも見に行きませんか。

寅彦はこの年 10 月 1 日、理学博士の学位を授与されているので、伝四がそのお祝いの手紙を送ったのだろう。そしてミケランジェロやダビンチに比したのだろう。御玉さんについては伝四が「散歩した事」（昭和 10 年版漱石全集月報第 16 号）に書いている。

自分と伝四の性格分析が書かれているが、二人が漱石のもとで余程親しくしていたことが分かる。

(15)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 42 年 1 月 2 日

新年御目出度う。

君の御宿所がわからなくて困って居たら早く御賀状を下さって難有う。昨日早稲田へ行ったら今君が来て帰ったという処であった。

新年早々先生等の謡を拝聴して来ました。宝亭でも富士見軒でも結構故いつでも御紹介願上候。

(16)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 42 年 3 月 27 日

御見送り難有う御坐いました。

今日家族を船へ乗せて郷里へ帰しいよいよ旅らしくなります。御自愛御勉強を祈ります。

(17)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 42 年 5 月 4 日 ミラノより

今日ダビンチに会いましたよ。

(18)寅彦⇒伝四〔絵はがき〕明治 43 年 1 月 1 日 ナポリより

旅で独りの正月をして早稲田の正月を思い出し西片町の正月を思い出し又君を思い出しました。御健康を祈る。

新年御目出度う。

寅彦は明治 42 年 3 月 25 日、留学のために東京を出発しているが、伝四も見送りにきていたようだ。学位授与を祝った手紙にダビンチのことが書いてあったのを覚えていたのだろう。

これまでに引用した以外の伝四の作品。

☆「苔清水」（明治 38 年 12 月、『ホトトギス』）

〈あらすじ〉

青山墓地を散歩する。土地が広く老木がなく、墓は割に新しくて手入れが行き届き、周囲には兵営や電車の道路などが有るため、無常とか凄愴とかいう激情をズット和らげて一種特別の心持ちを人に起こさせると思う。

ここには祖父母の墓があり、三年前には妹を葬った。偶然に遠藤静子の墓を見つけ、三年前に亡くなったことを知る。

静子さん一家は僕が 13 歳の時、隣に引っ越してきた。静子さんはお転婆であったが、僕の妹と遊ぶ時だけはなぜか別の女のようにおとなしかった。

静さんが 17 歳、僕が 20 歳の時、静さんに縁談があった。いざ結婚するとなると、

惜しいような気がするが、さりとて自分がどうするという訳でもない。遠藤姓になって、里帰りした時などは随分おとなしくなっていた。

墓標をみるとちょうど妹と同じ月に亡くなったことが分かり、仲が良かったのは早くからの約束ではなかったのかと思ったりする。

☆「夕雨」(明治 39 年 1 月、『ホトトギス』)

〈あらすじ〉

五歳の秀子は母が亡くなり、父が宇都宮に転勤になったので父の兄のところへあずけられている。いとこの継子とよく遊ぶ。

ある日継子の父が六時ころ帰ると、秀子が火傷をしていた。かくれんぼしていて客に紅茶を出そうとした下女と衝突して、顔に紅茶がかかったのである。継子の母は医者へ行かず、薬屋から塗り薬を買ってきて手当てしていたが、父は怒って医者を呼ぶ。痕は残らないようになると言われて、継子の父母は安心する。

主人はビールを飲んでい。妻や下女に叱ったことを詫げる。

☆「鷹が渡る」(明治 39 年 12 月、『ホトトギス』)

〈あらすじ〉

余が故郷なる大隅の南端を渡り鷹の一群が南を指して、秋の空を渡り行く偉観。群れは上昇しながら回転してだんだん小さくなっていく。この大集団が何回も繰り返される。住民は「鷹が渡る」と言って見送る。

余は故郷を出てから十幾年「鷹が渡る！」の一語で故郷の遠山近岳山村水廓を背景として、一大パノラマの如く余が眼前に浮かぶ、眼を閉じて去らぬ。人に騒がれても消えぬ。同時に幼時の秋の記憶は余が脳裏に黒潮の如く渦を巻き、渡り鷹の如く回転する。

「鷹が渡る」は多くの教科書に採用された。教科書図書館で調べたところでは、『国文新読本』改訂版巻 4 (大正 14 年 11 月 6 日訂正 5 版発行、至文堂) など少なくとも 6 種の教科書に出ている。

ネット記事によると、「大隅半島は、秋に南下するサシバの渡りの絶好のコースになっている。日本中から大隅半島を目指して飛んできたサシバは佐多岬に集結し、南下飛行を開始する。サシバの旅経つ日は十月初旬から十一月にかけての、雨の降らない曇り日が多いという。」とのことである。



左：『国文新読本』改訂版巻 4 (大正 14 年 11 月 6 日訂正 5 版発行、至文堂) 表紙、伝四「鷹が渡る」が掲載されている。

右：『漱石の読書と鑑賞』(昭和 11 年 5 月 20 日、小山書店) 箱、伝四「寒水村」、寅彦「団栗」「竜舌蘭」などが掲載されている。

(続く)